

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/第0050号
護國青年會議 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成20年6月30日

制裁解除、日本海に金正日の笑い声がこだまする。

家族会涙の訴え届かず

福田内閣、経済制裁解除決定

国民の批判をよそに北朝鮮に対する経済制裁の一部を解除しようとする福田政権に対し、与党だけでなく野党からも志ある議員を中心に懸念の声が強くなっている。

六月十七日、日本政府が経済制裁の一部解除を決めたことに対して、拉致被害者家族会と拉致被害者救出議連の平沼超夫会長らは首相官邸で町村信孝官房長官と面会し、「一方的な圧力緩和で、到底受け入れられない」との申入書を手渡した。また拉致被害者家族会の飯塚繁雄会長は、「北朝鮮が話し合いのテーブルにいたただけで制裁を解除するのは間違いだと思います」と述べて制裁解除を思いとどまるよう要請した。それに対し町村官房長官は、「制裁による経済効果は認めるが、それだけでは関係は断絶してしまふ。やはり話し合いを始め、良い糸口を見つけながら少しでもいい方向に前進させていく」ということでなければならぬ」と反論した。だが町村の言っていることは、どう鼻屑目に見ても間違っている。結果が出ていないのに北朝鮮が「再調査をする」と言っただけ

で制裁を解除するということは金正日の思う壺である。今まで北朝鮮は事ある毎に調査を約束してきた。しかし、偽の死亡診断書や他人の遺骨を渡すなどして日本を騙し続けてきている。そのたびに家族



31年前の横田めぐみさん

会のメンバーは奈落の底に突き落とされたが、失意の彼らを救ったのは決して切れることのない血の絆だった。

引き裂かれた肉親の情

三十一年前、十三歳の少女は暗く冷たい船底の壁を叩きながら「お母さん、恐いよ」。お父さん、助けて」と叫んでいた。その指は爪が剥がれ血が流れていた。鬼畜の地に拉致された少女の両親は我が子の生存を信じて年老

いた体に鞭打ち北朝鮮と闘い続けている。「あの子は歌が好きだった、良く笑った、弟を愛していた。そして私たちの太陽だった」無残にも引き裂かれた肉親の情を福田首相はどう思うのか。

増元るみ子さんの父・正一さんは、今わの際に息子の増元昭明家族会事務局長に向って、「わしは日本を信じる。だからお前も信じる」と癪に侵された体で最後の言葉を発した。何度も何度も裏切られながらも日本を信じて黄泉へと旅立たれた老人に対して、福田首相はそれでも他人事と囁くのだろうか。

外務省・斉木局長の憂鬱

六月十一日と十二日の両日開催された北朝鮮との実務者協議で、よど号乗っ取り犯の身柄引き渡しへの協力と、拉致被害者再調査の約束という政府側とすれば一定の成果を成果を挙げたはずの斉木昭隆アジア大洋州局長の表情が暗い。日朝協議を受け、政府は対北朝鮮制裁措置の一部解除を決めたが、与党内では「斉木氏が北京に行った時には、すでに上のレベルで方向性が決まっていたのではないか」という観測が出ている。事実斉木は親しい友人に「もう辞めたいよ、何年もかかって拉致被害者家族との間に培ってきた『信頼』という貯金を今



斉木昭隆局長

回で使い果たしてしまつたよ」と漏らしている。またある与

党議員は「斉木氏は困つた顔をしていて、自分の考えとは違つても、首相を始めとする上の指示に従わないわけにはいかないからな」と斉木の苦しい胸の内を代弁している。もともと斉木は北朝鮮問題では国交正常化よりも拉致問題を重視する強硬派として知られていた。本年一月にアジア大洋州局長に就任する際も、対北朝鮮融和派で路線が異なる福田首相の下では「気が進まない」と胸中を吐露していたが、いつかは意に染まぬ役割を担わされる日がくることを予期していたようだ。斉木は周囲に「再調査に進展がなければ万景峰号は入港させない」と語っているそつだがその言に偽りがなければ、強硬派としての意地を見せるべきである。

飲まされ続けてきた煮え湯

日朝実務者協議で北朝鮮が拉致問題の再調査とよど号「犯引渡しへの協力を提案したことが明らかになった。日

本政府はこれを「一定の前進」と評価し、北朝鮮への制裁を一部解除する方針を決めた。しかし、北朝鮮が再調査すると言ったことが本場に「一定の前進」と言えるのか、冗談ではない。

日本は過去に何度も煮え湯を飲まされたではないか。思い出し、四年前の平成十六年五月、小泉元首相が二度目の訪朝をした時のことだ。あの時、金正日は「白紙からの再調査」を明確に約束した。山崎拓や平沢勝栄のような木っ端議員に言ったのではない、卑しくも日本国内閣総理大臣に向かって述べた言葉で、謂わば国家のトップ同士の約束であった。しかし金正日は「どこ吹く風」とばかりに約束を反故にした。北朝鮮は再調査の結果として、横田めぐみさんの「遺骨」を提出したが、日本側の鑑定で偽物と判明した。六年前にも松木薫さんのものとする遺骨を出してきたが偽物だった。こうした裏切りの他にも北朝鮮には何度も騙された事実があるにも拘らず、経済制裁の継続や拉致問題の解決よりも国交正常化を優先する対北朝鮮宥和派の主張の裏には、「何か美味しい話」があるのではと勘ぐりたくもなる。今回の政府の対応は被害者と家族の絆を断ち切ろうとするもので今までの制裁効果を無にするものだ。

李下不正冠、瓜田不納履

他人の嫌疑を受けやすい行為

は避けるようにしなさいという戒めに「李下に冠を正さず・瓜田に履を納れず」と言う言葉があるが、このたびは拉致問題を巡り自民党内でこの戒めに関連するバトルが勃発した。



元副総裁



前首相

六月十二日、安倍前首相は都内のホテルで講演し、自民党の山崎拓元副総裁が中心となつて、いる超党派の「日朝国交正常化推進議員連盟」などが意図する対北朝鮮宥和政策に対して、「政府が相当の交渉をしなければいけない時、有力者も含めた多くの議員が政府より甘いことを言うのでは交渉にならない。経済制裁はそろそろ考え直したほうが良い」という意見は、百害あって一利なしだ」と正常化議連の動きを激しく批判した。さらに

「拉致は日本の国権の侵害であり、安全保障上の問題だ。一切妥協できない」と延べ、国交正常化よりも拉致事件の解決を優先すべきだとの考えを示した。安倍前首相は一貫して対北朝鮮強硬派の立場を貫き、前首相が設計図を描いた経済制裁が一定の成果を上げ、北朝鮮が困惑している今、何故制裁の手を緩めなければいけないのか、山崎らの画策の裏には「百害あって利権あり」との疑惑が湧いてくる。それは過去の日朝交渉の裏面にスポットライトを浴びせれば必ずと明らかになってくる。

北朝鮮利権を貪る悪党議員

一九九〇年、自民党元副総裁の故・金丸信を団長とする訪朝団が平壤を訪問して以来、両国の政府間交渉が度々行われるようになったが回を追う毎に金丸は莫大な利権を手中に収めた。一九九〇年に脱税容疑で逮捕された自宅から無刻印の数億円相当の金塊が見つかったことがある。当時、刻印のない金の延べ棒を作っていた国は北朝鮮の他に金丸の失脚後、北朝鮮の利権を手に入れたのは元自民党幹事長の野中宏務で、それを受け継いだのが現自民党選挙対策委員長の古賀誠である。

次いで利権が取り沙汰されたのが北朝鮮へのコメ支援である。一九九五年三月、自民、社会、

さきがけの与党三党の訪朝団が平壤入りし、同年六月に三十万トンのコメ支援をすることが決定した。このとき、コメ支援を積極的に主導したのが加藤紘一、元自民党幹事長であった。第一次支援以降、数回にわたり日本は百万トンを優に超えるコメ支援を行ってきた。しかし、拉致問題は進展せず、テポドンまで撃ち込まれた。この間いつたいいくらの血税が無駄に費やされたのだろうか。そして今再び、福田首相や山崎拓により同じ愚が繰り返されようとしている。

万景峰号入港禁止は制裁の象徴

金丸信、野中宏務以降、北朝鮮に絶大な影響力を持つ政治家はいなくなつた。山崎拓が日朝国交正常化議連を立ち上げた背景には自分の影響力を確立させたいことと、北朝鮮の利権を手に入れたいという思惑が見え隠れしている。己の保身と私腹を肥やすために拉致被害者と家族を捨て去ることなど断じて許してはならない。だが福田ポン助の推し進める北朝鮮外交はその不安が満載している。

日朝実務者協議の結果、政府は拉致問題の再調査と引き換えに人道支援助物資の輸送に限り北朝鮮籍の船舶の入港を認めるなど、制裁措置の一部を解除すると発表した。この船舶の中にはもちろんあの万景峰号も含まれている。福田ポン助は日本を信じた家族会の人々の心を土足で

踏み躪つたのである。万景峰号入港禁止は家族会にとって唯一の拠り所であり、北朝鮮に対する制裁のシンボルであった。それが簡単に解除されるといふことは日本が北朝鮮に大幅な譲歩をしたということ、味を占めた金正日が次にどんなカードを切ってくるかが懸念される。

米国の裏切りと上下座外交

ブッシュ政権は北朝鮮のテロ支援国家指定を解除する旨を議会に通告した。かつてブッシュは横田早紀江さんをホワイトハウスに招き、「全員が解放されない限り現在進行形のテロである」と被害者家族の訴えに理解を示した。だが今回ブッシュが決めた指定解除は日本と家族会に対する裏切り行為以外のなにものでもない。指定解除を受けて福田ポン助は「核の問題が解決に向うのなら、いいんじゃないですか」と抜け抜けとほざいている。ヤンキー如きに媚を売り支那如きパンダ如きに媚を売り挙句の果てに、露助如きチヨンの如きにも媚を売りまくってきた全方位上下座外交のツケがこの有様だ。自国民を守る気がない政治家など無用の長物にすぎない。

編集人・戸出蒼流

四年五ヶ月前に創刊した小紙は本号で五〇号となりました。浅学菲才の身が此処までこれたのは偏に皆様方の督励の賜と深謝しております。今後も宜しくお願い申し上げます。